The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代イギリス英語における強意副詞wayの発達について
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2025, 49, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

現代イギリス英語における
強意副詞 way の発達について

大津　智彦

1　導入

現代英語において way が強意副詞として用いられることは各種辞書において認められている。その代表として *Oxford English Dictionary* における way の副詞としての定義を引用すると次の通りである[1]。

2.
Originally U.S. At or by a considerable distance, far.
2.a.
1833-
Preceding a preposition. Also with a figurative sense of distance, overlapping with sense 2c.
Show quotations
CiteHistorical thesaurus
U.S. English
2.b.
1833-
Preceding another adverb, as down, over, etc. See also way back adv., way off adv., way up adv. Cf. away adv. A.II.9b.
Show quotations

CiteHistorical thesaurus

U.S. English

2.c.

1903-

Preceding too or a comparative adjective or adverb: by a great amount; much, far.

Show quotations

CiteHistorical thesaurus

U.S. English

3.

1965-

slang（originally U.S.）. Extremely, very; really. Cf. well adv. A.IV.16b.

Show quotations

CiteHistorical thesaurus

U.S. English

colloquial and slang

OED の引用文も挙げながら簡単にまとめると、この用法はもともとアメリカ英語に起源があり、統語的には直後に（1）や（2）のように前置詞または副詞などの不変化詞が、（3）や（4）のように too か比較級の形容詞または副詞が続くか、（5）のように修飾や語形変化を伴わない形容詞、副詞が続く場合がある。

（1）1972　The census figures confirm..that unemployment is way above the official figure.

（2）1984　Pick up your feet, fall in, move out, we’re going to a party way down south.

（3）1991　The music had got way too heavy for his liking, serious hard-core reggae.

（4）1986　You're way prettier than she is.

（5）2011　Her friend cupped a hand at her mouth and called out, 'He's way cute.'

意味面から見ると原義は距離が遠く離れていることにあり、比喩的に数や量が多いことを示すようになった後、extremely や very と同じように幅広い意味の形容詞・副詞などを修飾するようになった[2]。

さて、以上に way が強意副詞として発達してきた経緯をまとめたが、OED の定義に"originally U.S."と記されていたり、"U.S. English"と標識がついていたりするところからも窺えるように、筆者が見つけた先行研究はアメリカ英語を前提にしており、実証的なデータも COHA や COCA を用いたものばかりである[3]。しかしながら"originally U.S."ということから OED は他の英語の変種にもこの用法が広がっている可能性を示唆している。そこで本稿ではアメリカ英語に並ぶ英語の大きな変種であるイギリス英語において強意副詞 way がどれだけどのように浸透しているかを調査することを目的とする。以下、セクション 2 では調査方法、セクション 3 では調査結果と考察、セクション 4 では全体のまとめ、の順に進めていく。

2　調査方法

上記の OED によると extremely や very の意味での使用は 1965 年以降に用例が見つかるとされている。しかし、Margerie（2020: 10）の COHA を用いた調査によると extremely、very の意味で強意副詞 way が本格的に使われだすのは 1990 年代とまだ日が浅い。この調査では 1990 年代以降、イギリス英語ではどのように強意副詞 way が使用されてきたかを調査していきたい。

イギリス英語での現状を知るためにコーパスとして BNC2014 を用いた。なかでも強意副詞 way が口語を中心として現れることと（Margerie（2020: 5））、OED の定義から分かるように extremely、very の意味で用いられるの

が“colloquial and slang”ということであるので BNC2014 のうち informal speech と呼ばれるテキストジャンルを選んだ。BNC2014 の informal speech は 2012 年から 2016 年の間に募集に応じた一般人の会話を録音したものを文字起こししたものである。文字起こししたファイルには録音の際に記録した年齢、性別、教育レベル、方言などのメタデータも埋め込められているので社会言語学的な調査も可能である。informal speech の総語数は約 1,100 万語である。

歴史的な比較を行うため BNC1994 の spoken component のうち informal speech も検索することにした。この informal speech は demographic part と呼ばれており、BNC2014 の informal speech に対応し、同じように年齢、性別などの情報が付与されている。1991 年から 1994 年までの間に一般人の spontaneous speech を録音したもので約 400 万語からなる。1991 年から 1994 年までの録音ということは BNC2014 年の informal speech と約 20 年の間があることになる。また、1980 年代はアメリカ英語で way の直後に too が続く形式、1990 年代は直後に比較級が続いたり、extremely, very の意味での way が急激に頻度を伸ばし始めたころである[4]。つまり、1991 年から 1994 年まではアメリカ英語で強意副詞 way が急激に勢力を伸ばしつつあったが、イギリス英語にその影響が及び始めているかどうかまだ不明な時期に当たる。その意味で BNC1994 は BNC2014 と比較対照を行うのに好都合なコーパスだと言える。

なお、検索にあたってはどちらのコーパスとも＃LancsBox X 4.0.0 をコンコーダンサーとして用い、way をキーワードとして kwic 検索を行った。初めはタグを利用して way の副詞例だけを抽出する CQL 検索（[word＝”way” pos＝”R.*”]）を行ったが、前置詞、接続詞などの前の way は名詞としてタグ付けされており、多くの用例を見逃すことになることから、手間はかかるがすべての way を検索し、その後、手作業で副詞の way のみを抽出した。なお、手作業の際には way が節として成立した発話に現れる場合のみを対象とし、次のように句になっている場合や文が完成していない場合は対

象外とした。

(6)... nah way more amusing yeah for you .... (BNC2014 STH5 2391)
(7)... we are way more like we're more deep thinkers yeah ....
(BNC2014 SJV7 123)

3　調査結果と考察

まずは大きな傾向を見るために way の直後に続く語毎に BNC2014 と BNC1994 に分けて頻度を調べ表 1 にまとめた。2 行目の不変化詞とは前置詞と語形変化しない副詞（ahead や off など)、4 行目の比較級は more や -er の屈折を持つ形容詞・副詞、5 行目の形容詞・副詞は修飾や屈折を伴わない形容詞・副詞を指す。スラッシュ左側の数字は生データ、右側の数字は 100 万語毎の値である。下に BNC2014 から各行の例を挙げておく。

(8) I stopped using it way after that. (BNC2014 SG4R 219)
(9)... you're way too young at thirteen. (BNC2014 SV5A 1330)
(10) I actually do think I'm way warmer than most people.
(BNC2014 SDFR 142)
(11)... she was wanting to have lunch at twelve o'clock which is way early for me. (BNC 2014 SDHU 686)

表 1 において BNC2014 と BNC1994 の 100 万語毎の数字を比較すると明らかな差異が窺える。つまり、約 20 年間の間に強意副詞 way の直後に続く語が too と比較級の場合に頻度の大幅な伸びを示しているのである。また、BNC1994 では全く用例の見つからなかった形容詞・副詞が続く場合においても BNC2014 では用例が少数ながら確認できる。他方、BNC1994 の時点で最も頻度が高かった不変化詞が続く場合には BNC2014 で微増を示している

が大きな変化はない。OED の記載にあるように、way を強意副詞として用いるのはアメリカ英語から始まったことである。アメリカ英語の影響という視点からいま見た BNC2014 と BNC1994 の比較結果は何を意味しているのだろうか。この点を探るために COHA を用いてアメリカ英語における強意副詞 way の発達を調査した Margerie（2020: 8）にある Table 1 から 1970 年、1980 年、1990 年、2000 年の数値を抜き出し表 1 と比較しやすいように改変した表 2 を作成した。

表 1　直後に続く語別の way の頻度[6]

	BNC1994	BNC2014
不変化詞	25/6.3	82/7.2
too	4/1.0	69/6.1
比較級	1/0.25	87/7.6
形容詞・副詞	0/0.0	9/0.8
合計	30	247

表 2　COHA を使った研究（Margerie H.（2020））から改変

	1970	1980	1990	2000
不変化詞	273/11.5	256/10.2	447/16	402/13.6
too	5/0.2	17/0.7	81/2.9	145/4.9
比較級	1/0.04	2/0.08	14/0.5	55/1.9
形容詞・副詞	2/0.08	6/0.2	10/0.4	21/0.7

表 2 を見ると、1970 年代時点で強意副詞 way の後に不変化詞が続くケースは相対的に非常に多かったのに対して、too、比較級、形容詞・副詞が続くケースはまだまだ少ないことが分かる。OED によると不変化詞が続くケースの初出年は 1833 年とあり、1970 年代では十分に浸透していたものと思われる。他方、too や比較級が続くケースの初出年は 1903 とされている

が、1970 年代にはまだまだ浸透しておらず、この 2 者は 1990 年代から 2000 年代にかけて本格的に伸びを示している。形容詞・副詞が続くケースでは OED の初出は 1965 年であり、徐々に伸びてきているものの 2000 年代になってもまだ 100 万語毎の頻度は 0.7 である。

以上のアメリカ英語における強意副詞 way の発達と照らし合わせて表 1 における BNC1994 と BNC2014 の比較結果を考察すると、不変化詞を強調する way はもとよりアメリカ英語において定着していたため、イギリス英語においても BNC1994 時点で十分な頻度を見せ、BNC2014 になってもそれほど大きな変化は生じていない。それに対して、続く語が too や比較級の場合は、アメリカ英語において不変化詞に比べて強意副詞 way の浸透が遅く、1990 年代あるいは 2000 年代になって頻度が増している。このため BNC 1994 の時点ではアメリカ英語の影響をまだそれほど受けておらずまだまだ way の頻度は低いが、BNC2014 になるとアメリカ英語における 1990 年代あるいは 2000 年代の伸びを反映して BNC1994 に比して大幅な伸びを示しているものと考えられる。最後の形容詞・副詞が続くケースでは、アメリカ英語の 2000 年代においても way の頻度は 100 万語毎に 0.7 と低く、そのため BNC1994 では全く見られず、BNC2014 においてアメリカ英語の影響が小さいながら見られるという状況である[7]。このように強意副詞 way の発達はアメリカ英語においても現在進行中であり、イギリス英語への影響はその進行程度に応じたものになっている点に注目したい。また、BNC1994 と BNC 2014 の informal speech の録音には約 20 年の間隔があるが、上で見たように BNC1994 ではわずかしか見られなかった強意副詞 way の用法が BNC2014 にはアメリカ英語の影響として如実に現れている。この 20 年の間にどのようにそれが実現したのか興味深いところであるが、先に述べたように BNC 2014 には年齢、性別、教育レベル、方言などのメタデータが埋め込められている。今回の調査ではこのうち最も関連性が高いと推測される年齢を取りあげ、BNC2014 の informal speech における強意副詞 way の年齢別浸透度を調べることにした。

BNC2014 の informal speech では年齢を 10 段階に分け各年齢層におけるコーパスの語数が明示されている。それを利用して各年齢層の用例数を 100 万語毎に標準化（normalize）した頻度をもとに作成したのが図 1 である。このグラフから年齢層によって明らかに異なる傾向を示していることが分かる。まず言えるのは 60 歳以上において too、比較級、形容詞・副詞が後に続く強意副詞 way の新しい用法が全くないかほぼなく、OED で初出が 1833 年とされ、既に BNC1994 で頻回見られる不変化詞が続く古い用法に限定されている点である。用例を下にいくつか挙げる。

(12)... that'll keep us going way past this week anyway.
(60-69, BNC2014 SMF3 53)

(13)... we got to get there way before five. (70-79, BNC2014 SY4A 1239)

(14)... the percentages were way up there. (80-89, BNC2014 SLRD 766)

(15)... he was way up on the scale of it. (90-99, BNC2014 SPG4 2112)

60 歳以上ということは BNC1994 の時代である 20 年前には 40 歳以上ということになるが、そのあたりの年齢層から新しい用法の使用に抵抗感があったと推察される。

図 1 から窺えるように新しい用法を最も多く使用しているのは 11 歳から 49 歳までの年齢層である。この年齢層では way の後に too や比較級が続く新しい用法も一定水準以上の頻度を示し、11 歳から 39 歳までの年齢層では COHA の調査でも頻度が低い形容詞・副詞が続く用法さえ観察できる。後者の例を次に挙げておく。

(16)... I'd actually way prefer I actually prefer school uniform to wearing normal clothes. (11-18, SLRY 372)

(17)... your mattress is way comfortable than mine. (19-29, STGP 9)

(18)... we'll get there like way early. (30-39, SHX8 346)

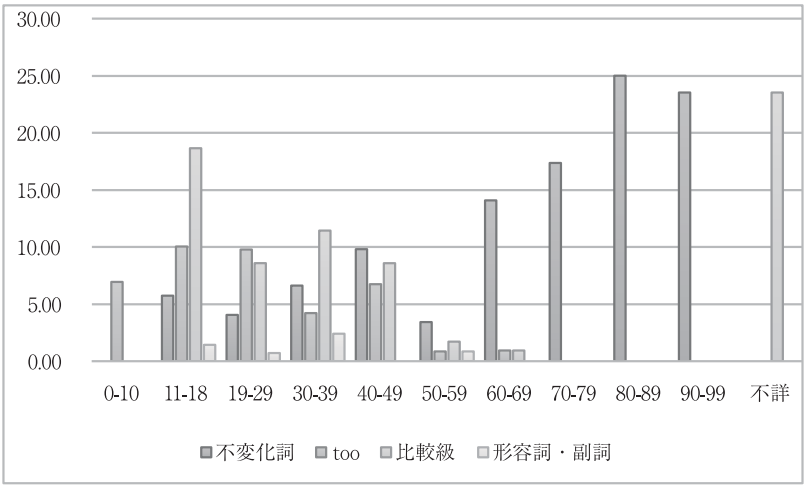

図 1　BNC2014 の informal speech における強意副詞 way の年齢層別浸透度[8]

不思議な現象であるが、そういった新しい用法を採り入れている年齢層ではより高い年齢層に比べて不変化詞が続く旧来の用法の頻度が下がっているのである。これは不変化詞を way で強調するのは高齢者の特徴であるとして若い年齢層では避けられているのであろうか。この点は強調副詞と年齢層という観点からより広範囲な研究によって検証する必要があるだろう[9]。関連して指摘しておきたいのは 0-10 歳において、全用法において強意副詞 way が 1 例しか用いられていない点である。この結果もまたより広範囲な研究、つまり強意副詞の修得と年齢やひいては言語習得全体にかかわる問題であるが、少なくとも強意副詞 way は幼い子供においては修得されにくいものであることを示唆している。あと一つ気になるのは 50-59 の年齢層において新旧を問わずどの用法についても頻度が少ない点である。この年齢層は新しい用法を積極的に採り入れた 40 歳代までとそれに抵抗を示した 60 歳代以上のちょうど間に挟まれた世代である。このように狭間に立たされたことと強意副詞 way 全体の頻度の低さには何か関連性があるのだろうか。あるいはコーパスの規模がさらに大きければ解消される単なる偶然だろうか。現時点

でどちらかは不明であるが、問題提起として記しておきたい。

4　まとめ

以上、BNC1994 と BNC2014 の informal speech の部分を用いてアメリカ英語で始まった強意副詞としての way のイギリス英語への浸透度を調査した。まず、BNC1994 と BNC2014 とでは浸透度に明確の差があったが、① way の後に続く語が too と比較級の場合に頻度の大幅な伸びを示した。また、②BNC1994 では全く用例の見つからなかった形容詞・副詞が続く場合においても BNC2014 では用例が少数ながら確認できた。他方、③BNC1994 の時点で最も頻度が高かった不変化詞が続く場合には BNC2014 で微増を示しているが大きな変化はない。そして、④これら 3 つの結果は強意副詞 way の発達がアメリカ英語においても現在進行中であるため、イギリス英語への影響はその進行程度を反映したものになっていることが分かった。

さらにより踏み込み、浸透の過程を探るため BNC2014 の informal speech に付加されている年齢のタグを利用して調査したところ、11 歳から 40 歳代まではアメリカ英語における強意副詞 way の発達に応じた浸透度を示している一方、60 歳代以上ではアメリカ英語における発達の影響の跡が見られず、不変化詞を修飾するという従来の用法を踏襲するにとどまっていることが分かった。BNC1994 と BNC2014 の informal speech の録音時期には約 20 年の間があるため、この結果は 40 歳代以上では新しい用法を受け入れにくい傾向を示唆するものである。この点は他の言語変化も含めてさらなる研究が必要である。もうひとつ年齢層に関して興味深い結果は 0-10 歳の間ではほとんど強意副詞 way の出現がなかったことである。これは言語習得に関わる問題で、way のみならず、広く強意副詞全体の子供による獲得というテーマの中でさらに研究が進められるべき課題であろう。

注

1 “Way, Adv.” *Oxford English Dictionary,* Oxford UP, December 2023, https://doi.org/10.1093/OED/1045093599.

2 なお、本稿では原義の距離が遠く離れている用法においてもそれを強意副詞とみなす。構文、意味の発達の経緯については Margerie（2020）が COHA を使った調査を行い、OED の記述を裏付ける結果を出している。

3 Feltgen（2020）、Margerie（2020）、Portero Muñoz（2022）がその例である。

4 Margerie（2020: 8, 10）の Table 1 および Figure 1 を参照。

5 BNC1994 や Spolen BNC2014 は Lancaster 大学の CQPweb（https://cqpweb.lancs.ac.uk/）でも検索可能だが、ここでも too の前の way は名詞としてタグ付けされている。

6 スラッシュの左側が生データ、右側は 100 万語毎の頻度である。

7 アメリカ英語は COHA 全体、つまり書き言葉 9 割、話し言葉 1 割の検索結果であるのに対して、イギリス英語は話し言葉のなかでも informal speech を検索した結果であるので両者の数値を直接は比較できない。しかし、COHA 全体の検索結果はアメリカ英語における強意副詞 way の発達のおおまかな指標として扱うことはできると考える。

8 このグラフのもとになったデータは下記の通り。

生データ

	0-10	11-18	19-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	不詳	合計
不変化詞	0	4	17	11	16	4	15	10	3	2	0	82
too	1	7	41	7	11	1	1	0	0	0	0	69
比較級	0	13	36	19	14	2	1	0	0	0	2	69
形容詞･副詞	0	1	3	4	0	1	0	0	0	0	0	69

100 万語毎の頻度

	0-10	11-18	19-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-99	不詳
不変化詞	0.00	5.74	4.06	6.62	9.81	3.43	14.08	17.36	25.00	23.53	0.00
too	6.94	10.04	9.78	4.21	6.74	0.86	0.94	0.00	0.00	0.00	0.00
比較級	0.00	18.65	8.59	11.44	8.58	1.71	0.94	0.00	0.00	0.00	23.53
形容詞･副詞	0.00	1.43	0.72	2.41	0.00	0.86	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

9 例えば Ito & Tagliamonte（2003）では強意副詞 really と very の年齢層別比較を行っている。

考参文献

Bolinger, Dwight（1972）*Degree words.* The Hague & Paris: Mouton.

Feltgen, Quentin（2020）“Diachronic emergence of Zipf-like patterns in construction-specific frequency distributions: A quantative study of the *way too* construction.” *Lexis. Journal in English Lexicology,* 16.

井邊築真，高田未羽（2024）「比較級の強調語句の相違性についての考察」英語学特別演習における口頭発表．大阪大学箕面キャンパス．2024 年 1 月 24 日．

Ito, Rika and Tagliamonte Sali（2003）“*Well* weird, *right* dodgy, *very* strange, *really* cool: Layering and recycling in English intensifiers.” *Language in Society,* 32（2）：275-279.

Margerie, Hélèn（2020）“*Am I way wrong on this one?* On the multiple semantic sources and paths of development of the amplifier *way* in American English.” *Lexis. Journal in English Lexicology,* 16.

Méndez-Naya, Belén（2008）“Special issue on English intensifiers.” *English Language and Linguistics,* 12.2: 213-219.

Paradis, Carita（2000）“It’s well weird: Degree modifiers of adjectives revisited: The nineties.” In Kirk John M.（ed.）, *Corpora galore: Analyses and techniques in describing English.* Amsterdam: Rodopi, 146-160.

Portero Muñoz, Carmen（2022）“‘It’s way too intriguing!’ The fuzzy status of emergent intensifiers: A Functional Discourse Grammar account.” *Open Linguistics,* 8（1）, 618-649.